

氏名(本籍地)	岸田幸弘(長野県)
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	博甲第67号
学位授与年月日	平成25年3月16日
学位授与の要件	昭和女子大学学位規則第5条第1項該当
論文題目	登校支援を促進する学校教育システムに関する研究

論文審査委員	(主査)	昭和女子大学教授	鵜養 啓子
	(副査)	昭和女子大学教授	小川 哲男
		昭和女子大学教授	今城 周造
		東京福祉大学教授	田上 不二夫
		千葉大学名誉教授	三浦 香苗

論文審査結果の要旨

申請者は、25年に及ぶ小学校・中学校の現場の教師経験の中で、学級経営に取り組み、教育相談実践を行う一方で、それらの実践経験を研究としてまとめ、理論化する努力をしてきた。本論文は、教師による不登校の児童生徒支援を出発点としながら、教師の子どもへのかかわりは、総じて「登校支援」というかかわりに集約することができることをまず述べている。その前提の上に、個々の教師は、「学校」という場に守られ、教師同士の協働的営みの中で児童生徒やそれを取り巻く環境的要因をアセスメントし、それによってかかわりを検討し、実践し、その結果を精査し、さらなるかかわりを深めていくという発展的な螺旋状のサイクルの中でその教育実践を進化させていくことができる。

本論文は次の点で独自性があり、価値のある論文であると考えられる。

1. 教育実践研究であること

本論文は、申請者が学校教員として教育実践に携わってきた経験を踏まえ、それを研究者としての視点で見直してまとめたものである。教師は、教育実践の中で子どもたちに対してかかわりを持ち、長年の経験で培われた教師としての信念や本人の個性などに裏打ちされたさまざまな支援活動を行っている。しかしながら日々の営みの中で、それらは積み重ねによる理論化や第三者的な目による検証をされることなく、消えていってしまうことが多い。本研究は教師の教育実践に目を向け、それを振り返り、客観的視点で整理しなおして、新たな認識に至っているという点で、今までに類を見ない独自性を持っている。申請者が当事者であり研究者でもあるという利点を生かして、実践事例を見直している点は、申請者ならではの研究方法である。

2. インタビューによる質的研究と、調査による量的研究を組み合わせていること

研究の出発点として、教師による不登校生徒支援を取り上げ、面接調査による実践事例

研究をする一方で、小学校から高校までの多くの教師に質問紙調査を行い、不登校児童生徒へのかかわりに関して、登校支援という観点から「教師に固有の信念や教師の個性と、事例そのものの独自性や学校環境が、児童生徒への登校支援を決定している」「かかわりの基礎としての事例に関するアセスメントの不足」という結論を導き出している。量的研究と質的研究のどちらかではこの論文に見られるような知見には至れないと考えられる。

3. 1 小学校の学校全体としての取り組みについて実践事例研究を行い、学校として個々の教師の教育実践をサポートする体制づくりについて明確化していること

実際の1小学校が2年間にわたって行ってきた実践事例を、その中心にあった登校支援研究委員会の研究委員長であった申請者の手でまとめるとともに、評価的な視点から検討している。事前準備の段階から、情報整理共有の段階を経て、学校内でこの委員会がコンサルタントとして機能して各教員の実践活動を支援できるようになるまでの経過を、あらためて本論文で見直している。本人が当事者でもあり、研究者でもある立場を十分生かしている部分といえる。

4. 学校教育の質的進化にとって、教科教育を中心とする授業研究と、教育相談を中心とする学級経営研究の双方が必要であることを踏まえ、これまで十分に行われてきていなかった后者を、学校教育の柱として取り上げ、モデルとして提供していること

学校内では、研究授業の形で、授業研究はよくおこなわれているが、学級経営は教員個人にゆだねられ、相互に検討しあう機会ほとんど持たれていない。申請者は本論文の研究全体を通して、その問題点を明確にし、学校の中には授業研究だけでなく、学級の教育課題や問題を学級経営研究の視点からとらえ、アセスメントから支援指導計画を立て事例検討会を通じて指導計画・アセスメントによる見立ての修正を行いこのサイクルを通じて新たな学級経営の展開につながるモデルを構築している。これが明確化されたことは、この論文の重要な点である。

しかしながら、本研究にはいくつかの問題点も見受けられる。一つには、実践事例研究が、申請者自身の経験や周囲の人からの資料に限られ、客観性の担保にやや不満足な点があること、また、教育実践モデルの構築をしているが、そのモデルを使って新たな学校で実践し検証するところまでに至っていないことである。その点では、今後課題を残しているといえる。

上記の問題点を踏まえた上で、本論文を主査及び副査で審査した結果、その独自性、現代の教育現場への問題提起として、意味のあるものであり、博士論文としての価値があるということで一致した。